南十字星

大阪大学外国語学部
（旧大阪外国語大学）
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語同窓会

2012年秋　第15号
発行　南十字星会

連絡先　大阪府池田市五月丘 2-5-113-402
電話 Fax　072-753-1693
Email　rocky3@wombat.zaq.ne.jp

東南アジアを転々
現地の人々に学ぶ

辻　修司　('64卒)

1967年8月のある日。まだ、あたりは明るかった。マニラ空港に到着。真っ青な空、こんな青空を今まで見たことはなかった。ヤシの木の強烈な臭いが、生暖かい風に乗って鼻をツンと刺す。ついにこの日が来た。

もうちょっとやそっとでは日本へ帰れない。たとえ親が死んでも。強い決意がふつふつと湧いてくる。何事にも積極的に正面からぶつかっていこう。心の中にしっかりと刻んだ。ただ、初めての海外駐在生活。一方では心細さと不安もあった。イミグレも税関も無事に通過して外に出る。先輩駐在員と中国系フィリピン人青年の2人がニコニコしながら出迎えてくれていた。

会社の阪田商会(後にサカタインクス)では海外部門に所属。“商社”であり、繊維以外は何を扱ってもよい方針だった。翌朝からいよいよ現地での仕事が始まった。英語には少しは自信があったが、ちょっと様子がおかしい。発音が違う。聞き取れない。頭が真っ白だ。毎日々々、夜にアパートへ戻ると疲れがどっと出て、何も食べたくない。

マニラはこの頃、まだ第2次世界大戦後の空気が強く残っていた。タクシーに乗るのはこわごわ。いつどこで運転手やその仲間の連中にひどい目にあうか。治安は非常に悪く、知人は何人も“ホールドアップ”されていた。こんな状況が毎日続いていたが、本社も1年後には他社が新車に変える時にその中古車を買ってくれて、自分の車で仕事ができるようになった。おかげで成績も随分良くなる。マニラでの生活が3年過ぎ、帰国が決まっていたが「セブ島にオートバイ販売の拠点をつくる、行ってくれないか」と言われた。新しいところでやるのも面白いだろう。

すぐOKし、セブ島に移動した。活動地域はフィリピンの南半分にあるビサヤス、ミンナダオと呼ばれる地方である。毎月飽きもせずこの地方を2、3週間、村から村へと移動し、村の有力者、村の銀行、大きな商店（売っている品物は問わず）を訪ねて、オートバイ市場を調べた。この時代、日本人がこんな地方まで出かけることはまずなかったので親切にしてくれた（セブ島で日本人が1人いると聞いていたが会わなかった）。

泊まるところに難があった。1日1ﾄﾞﾙと安いものの、ベッドにはマットがなくスプリングの上にシーツが1枚敷いてあるだけ。背中は痛いし、ギシギシ音がする。その上、蚊がぶんぶん。しかし、毎日充実していた。目標は本社のセールスを超えること。3年目に達成し、次の駐在員へ引き継いだ。彼は3カ月で病気になり帰国。その後はセブ島に駐在員を置いていない。

インドネシア駐在が始まるのはまだまだ先だが、セブ島時代に学んだことが後の仕事や人生に大いに役立っていく。経営学者であり思想家でもあるドラッカーが日本に紹介されたのもこの頃。新鮮で、著書も真剣に読んだ。人間の生き方についても考えた。「人間はどこから来たのか？死後どこに行くのか？」。(写真は、初の海外赴任。ヤシのそばでマニラ湾をバックに)

ジャカルタの Taman Mini で

セブ島の小高い丘の上にお寺がある。夜その寺から見上げる空は格別。星が、それこそすぐ手の届きそうなところに、煌めいている。セブ島の隣のボホールと呼ばれる島から小舟でセブ島へ戻るさい、大魚の群れが泳いで付いてくる。夢心地のようだった。

台風が接近し、急きょ「AIR タクシー」に乗ったことがある。座席は 2 つ。空気調整装置がなくて、上空では気温が下がる。震えが止まらない。空の上が実に寒いことを、身をもって知った。セブ島駐在 3 年、いったん帰国する。病気もせず、元気に過ごせたのはよかった。

1975～78 年はオーストラリア駐在、1985～89 年までシンガポール駐在。そして、いよいよ 1991 年からインドネシア駐在だ。このときから本業の印刷インキの現地製造販売の仕事が始まる。それまで先輩が苦労を重ねてこられたが、ジョイントベンチャー先からいろいろな要求が出て、ジャカルタ駐在が実現した。やっと“舞台の袖”に顔を少し出すことになる。

今までやったことのない仕事。また 1 からだ。しかし、何も怖くはなかった。とにかく耐えて、耐えて、耐えた。真正面から向かっていけば少しずつ道が開ける。あちこちから助けが来る。使い物にならなくなっていたインドネシア語も身についてきた。そんなこんなの 3 年が経った頃には、ジャカルタの会社も黒字になった。

この間ゴルフは 1 度もしなかった。そうこうしているうちに、本社からも期待されるようになってきた(写真㊤は 2005 年 8 月、ジャカルタでの 15 周年記念イベント)。更なる努力。ローカル社員も自分の仕事に集中する。実績が上がる。互いに協力し合うようになると、会社もどんどん伸びていくようだった。

いろんな経験を通してインドネシアの人々の良い点が見えてくる。それまで「問題と思っていたこと」が、問題でなくなり、互いに協力して解決策を見つけ出していける。インドネシアで生活するのが生きがいとなり、楽しいと感じる。不思議なことに、歯車がかみ合うと、自然に周りに人々が寄ってきて、情報も集まる。

ジャカルタは 1995 年頃から少しずつ近代的になってきた。長い間空き地だったところが徐々に埋まる。自分にも変化が来た。東南アジア支配人を任され、フィリピン、マレーシア、ベトナム、タイへも出かける。そしてインドを開拓する機会が訪れた。またまた、ゼロからの仕事だ。本社が合弁を考えていた会社が潰れ、どう切り込むか。とにかく、インド人の相棒を決め、2 人でインドの印刷会社を回り始めた。毎月 2 週間インド中の印刷会社を 5 年間回った。少しずつ道が開けてきた(写真㊦はインドで)。

注文が取れると、ジャカルタから出荷する。そして自信をもって本社に提案。デリーの郊外に工場を建てたいと思ったのだ。当時、日本企業がインドに進出する機運はまだなかった。ほんの数社出ているが“様子見”の商売だ。説得には時間が掛かったが、こちらも引けない。100%日本側が株を持てるなら OK ということで承諾を得る。半年後インド政府から許可が取れ、工場建設に入る。ここでも耐えに耐えた。

インドネシア人と同様、フィリピン人もインド人も好きになっていた。会話が途切れない。当然なことだが、それぞれ国の言語があり、性格もまちまち。しきたりや習慣も違う。そして、いつも帰るところはジャカルタだった。ホッとする。故郷なのだ。

どの国も伝統を守りながら、破壊があり、発展していく。物質的には人間は進歩しているようでも、精神的にはどうか。何千年も変わってはいないのではないか。「自分はどこから来て、どこへ行くのか」。誰がその回答をくれるのか。時には生きがいを覚えたり、悲哀を感じたりしながら、今後も「Hidup secara adil!」。

結局 1991 年から 2007 年までジャカルタで生活し、退職した。2007 年から現在までバンコクで生活するも、Bahasa Thai には悩まされている。

寄稿　*Apa & siapa*

身に染み込んだ インドネシア魂

西岡　郁恵（2012卒）

卒業式後の記念写真。右下が筆者

「どこのIbuかと思ったら！」。卒業式の時にかけられた言葉でした。式の当日は、UI留学時にオーダーメイドで作ったクバヤを着て出席しました。クバヤは少し寒かったですが、最後にインドネシア語生としての個性を出すことができれば…。そんな気持ちからでした。私は、インドネシアに行くと、中華系かバタックの出身と間違われることがよくあり、クバヤを着ても全然違和感がなかったようです。インドネシアに呼ばれてインドネシア語を選んだのだなぁ、とつくづく感じるのですが、これほどインドネシアが大好きになるとは自分でも思っていませんでした。

初めてインドネシアに足を踏み入れたのは、大阪外大アチェ支援学生の会の活動でアチェに行った時でした。津波の被害者の方々を元気づけに行くのだと張り切っていました。でも、気がつくと自分が彼らの笑顔や優しさから元気をもらっていました。それがインドネシアにもう1度行き、彼らの笑顔をまた見たいと思ったきっかけでした。

そこからアチェに2回行き、バリに行き、ジョグジャカルタに行き、UIに約8か月留学もしました。留学時には旅行でプロウスリブ、ボゴール、バンドゥン、トラジャへも行きました。友達には「インドネシア どんだけ好きやねん！」と言われるほど。卒業旅行先もインドネシアでした。スラバヤではブロモ山に登りました。ちょうど雨季だったので、ご来光がはっきり見えなかったのが残念でした。インドネシアの魅力は、それぞれの土地で特有の文化があり、どこへ行っても常に新しい発見ができることだと改めて思います。

しかしながら、在学中インドネシア語の勉強がどうしても嫌になった時期もありました。毎日々々、あのぶ厚い英印の辞書を引いて予習するのに飽きてしまったのです。どうやって乗り越えたのか。今考えると、まわりの仲間の存在が大きかったと思います。皆が、共同研究室や講義の部屋で、毎日ちゃんと予習しているのを見て、焦るとともに、負けたくない！私も頑張ろう！という気持ちになれました。また、たくさんのインドネシア人との出会いも、インドネシア語を勉強するモチベーションとなりました。

サフィトリ先生には、授業以外でも会話の練習をしていただきました。おかげで、本当に上達したと思います。2008年には、南山大学のスピーチコンテストに参加し、優勝したことも大きな自信と素晴らしい経験になりました。

留学時の友達とは、今も連絡を取り合っています。卒業論文のテーマは「Facebookにおけるインドネシア人学生の言語使用について」でした。そのアンケート調査でも助けてもらいました。

振り返ると、インドネシア語を通じて出会えた人々とのさまざまな体験が、自分を育ててくれたようです。インドネシア語専攻で本当に良かった、と心底思っています。今の仕事は全くインドネシアと関係はありませんが、いつか自分でインドネシアと関わりを作っていきたいと考えています。趣味で始めた沖縄三線でガムランとコラボレーションするのも、今の私の夢です。

この濃厚な5年間、体にすっかりしみ込んだインドネシア魂で、これからも日々頑張っていきます。

（中央の写真は㊤がAchehで、㊦はSerangで）

キャンパス便り

准教授　菅原 由美
（外国語学部インドネシア語専攻担当教員）

平成 24 年度新入生入学

3 月に無事、18 人（外大生入学 10 人、阪大生入学 8 人）が卒業していきましたが、4 月、今度はインドネシア語専攻に 12 人の新入生が入ってきました。最初は、今年は男性が 4 人もいると驚きましたが（昨年が 1 人でしたので）、授業が始まってみると、4 人いても、女性陣のパワーには勝てないようです。というのも、今年の 1 年生の女性たちはとても元気だからです。

今年から、3 月に完成したばかりの E-learning*を使って授業をしていますが、授業では笑い声が絶えません。毎回の授業での小テストも皆そろってがんばっています。今年の夏はまだインドネシアに行く機会はないようですが、この調子で後期もがんばってもらいたいと思います。

※（高度外国語教育全国配信システムプロジェクト－インドネシア語独習コンテンツ http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/ind/index.html）

平成 24 年度の新入生たち　全員 12 人がそろって

共同研究室活動　インドネシア料理

昨年に引き続き、共同研究室で、6 月 21 日に 2 年生が中心になって、インドネシア料理を作りました。

今回のメニューは、ソト・アヤム（鶏肉スープ）とタピオカ・ジュースでした。まずは、ニンニク、バワン・メラ（赤タマネギ）を大量にみじん切りして、その他の香辛料も叩いたり、つぶしたり…。それを油で炒めてから、鶏の胸肉とともに煮て、鶏肉が柔らかくなったら、取り出して、肉を割きます。その間に卵、ジャガイモ、もやしをゆで、キャベツ、トマトを切り、それらと鶏肉をお椀に入れ、最後にスープを上から注ぎました。インドネシア料理ってこんなに作るのが大変なんですね、というのが 2 年生の感想です。

今年も 1 年生が豊中キャンパスでの 5 限の授業が終わってから、11 人（ほぼ全員！）駆けつけてくれました。また今年も留学生が参加してくれましたので、彼らと一緒に会話をしながら、楽しく食べました。

夏祭り

7 月 7 日土曜日、箕面キャンパスで学生待望の夏祭りが開催されました。今年は、2 年生が「タピオカ・ジュース」を作りました。年々、規制が厳しくなっているようで、メニュー選びに一番苦心していました。サフィトリ先生にインドネシアからタピオカを買ってきてもらって、それをどう調理するか悩んでいました。2 年生の説明によると、結局、タピオカを煮て、シロップを入れて冷やして、「タピオカ・ジュース」になったようです。一杯 200 円で、300 杯分ほぼ完売したとのことです。暑い中、ご苦労様でした。

サザンクロス講演会

4 月 18 日、ウダヤナ大学のイ・グスティ・マデ・スチャヤ教授が「バリ伝統社会の現状とその変化・維持」というテーマで講演。バリ農民が移民した地域では稲作がもたらされ、農業や経済にも影響を与えた。背景には、バリヒンドゥーと現地社会との宗教的・文化的な融和があった。スマトラ南端のランプンにある“移民村”などの例を写真スライドで紹介した。

≪教員の現在の研究から≫

Peristiwa Akbar di Tanjungpinang :Revitalisasi Budaya Melayu III

外国人教員　サフィトリ・エリアス

Tanjungpinang yang juga dikenal sebagai Kota Gurindam Negeri Pantun, adalah sebuah kota yang terletak di ujung selatan Pulau Bintan. Kota yang menjadi ibu kota dari Provinsi Kepulauan Riau, sarat dengan unsur sejarah, budaya, dan adat istiadat Melayu, sehingga dikenal sebagai Pusat Budaya dan Tamadun Melayu.

Pada tanggal 24 – 27 Mei 2012, di kota Tanjungpinang berlangsung kegiatan yang menjadi momentum bangkitnya kembali budaya yang pernah tumbuh di kawasan Nusantara, yaitu dengan digelarnya Revitalisasi Budaya Melayu III, yang bertemakan "Alam Melayu dari Ingatan ke Kenyataan". **(写真㊤)** Kegiatan ini merupakan lanjutan dari Revitalisasi Budaya Melayu II (2008) , dan Revitalisasi Budaya Melayu I (2004).

Salah satu mata acara yang tercakup di dalam kegiatan Revitalisasi Budaya Melayu III adalah Seminar Internasional Tradisi Lisan VIII.**(写真㊨)** Seminar ini diikuti oleh 151 peserta yang berasal dari dalam dan luar negeri.

Dalam kesempatan tersebut, makalah yang saya sajikan berjudul "Pansori: Menyanyi atau Mendongeng?" Isi makalah ditekankan pada upaya pelestarian Pansori yang telah dilakukan oleh pemerintah Korea, dalam kaitan untuk melihat revitalisasi dari negara di luar Indonesia.

Pansori adalah sebuah bentuk musik tradisional yang dibawakan oleh seorang *kwangdae* 'penyanyi tunggal' dengan iringan *buk* 'gendang' dari seorang *gosu* 'penabuh gendang'. Melalui *sori* 'suara, nyanyian', *aniri* 'tuturan', dan *pallim* 'ekspresi fisik', seperti : gerak, tari dan mimik, *kwangdae* membawakan sebuah kisahan dramatis.

Ancaman dari arus perkembangan modernisasi yang pesat di Korea, merupakan salah satu pemacu untuk menyelamatkan karya-karya seni. Pada tahun 1964 Pemerintah Korea mengakui Pansori sebagai karya seni tradisional yang sangat penting dan merupakan salah satu warisan budaya nasional, harus ditangani secara serius oleh Pemerintah Korea. Kepunahan Pansori dapat diatasi dengan usaha revitalisasi yang telah dilakukan oleh pemerintah. Hasil nyata yang telah terlihat adalah UNESCO menyatakan Pansori sebagai *Master Piece of the Oral and Intangible Heritage of Humanity* pada tanggal 7 November 2003.

Kegiatan seminar dilaksanakan sejak pagi hingga petang dan dilanjutkan dengan acara festival pada malam hari.

Acara festival diisi dengan pentas seni lakon, permainan rakyat, pameran buku, pameran kerajinan tangan, festival tradisi bahari, musik dan tarian dari pelbagai daerah di Indonesia (Siak, Jambi, Batam, Bintan, Nusa Tenggara Barat, Sulawesi Tenggara/Kabupaten Muna), dan juga pentas dari pelbagai negara (Malaysia, Thailand, Cina) yang menambah semarak suasana pesta budaya Melayu tersebut. Peristiwa akbar di Tanjungpinang ditutup pada tanggal 27 Mei 2012 dengan meninggalkan kenangan indah dalam hati para tamu dan penduduk setempat.

リアウの州都タンジュンピナンで5月に「第3回ムラユ文化復興大会」が開催されました。サフィトリ先生はその中のイベント「第8回伝承口承文化国際セミナー」で、韓国での事例を発表。「パンソリ: 歌か語りか」という題です。原文のままでよいでしょうが、原真由子先生が和訳してくださいました。スペースの都合で、そのポイント部分の要約を掲載します。

パンソリとは、太鼓奏者(gosu)の太鼓(buk)の伴奏に合わせソロの歌い手(kwangdae)が歌う伝統的な韓国の歌唱形式です。歌声(sori)、語り(aniri)、動き、踊り、表情といった身体表現(pallim)によって、歌い手(kwangdae)がドラマティックに物語を披露します。

韓国では急速な近代化が見られましたが、その脅威が伝統的な芸術作品の保存活動を後押しする1つの要因になりました。1964年に、韓国政府はパンソリを非常に重要な伝統芸術として国民的文化遺産と認定し、その保護に取り組むことになりました。その結果、パンソリ衰退の危機は乗り越えることができたと言えるでしょう。2003年11月7日には、ユネスコによってパンソリが「人類の口承および無形遺産の傑作」と認定されました。

ジャカルタ発

Yakiniku(私を信じて!)

江本　浩章　('92 卒)

1992 年 3 月に大阪外国語大学インドネシア語学科を卒業して 20 年の歳月が過ぎました。過去に思いを馳せながら 20 年を振り返ってのメッセージということで書かせていただきます。

① インドネシア留学を思い立つ

大学に入りソフトテニスを続けていたものの燃え尽き症候群からか何かが足りない。日々渇望を感じるようになり、3 年生のころまで悶々と過ごしていました。大学で学ぶインドネシア語も中途半端。ソフトテニスも高校時代のように燃える対象となっていない…。このまま 1 年後には就職、卒業するのももったいないとの思いが芽生え、1 年間休学してインドネシアを極めてみようとインドネシア大学に語学留学することを思い立ちました。早速申し込み。自前で人を探しお願いしてジャカルタの教育文化省での VISA 申請手続きなど実際に許可が下りるまで半年以上かかりました。必要とされる手続きを何とか整えて、1990 年 4 月にジャカルタに来ることができました。

ホームステイ先も決まり約 10 カ月でしたが、密度の濃いジャカルタでの生活を過ごしました。最初の 3、4 カ月は大学にも通っていましたが、座学だけでは面白みに欠ける。バックパッカー旅行者としてバスと汽車を乗り継ぎジャワ島、バリ島へ。道中で出会う人々と飯を食い、仲間になり、家に泊めてもらうこともしばしばでした。

バリで偶然出会ったたばこの卸売り業者とは妙に馬があい、2、3 泊させてもらった覚えがあります。疲れからか風邪をひいて熱もある。体格のいい家主が部屋に入ってきて大きなコインで私の背中を強く引っ掻こうとします。「申し訳ないが私はそのような趣味はない」と丁寧に断ると、さびしげに部屋を出て行きました。ジャカルタに戻って聞いてみると、背中を真っ赤にこすることで、そこから熱を逃がそうという伝統療法とのことでした。それならそうとちゃんと説明してもらえればよかったのですが、コミュニケーションが足りなかったようです。

ブロモ山の山頂に立つ=2012 年 3 月

「留学」というよりも「遊学」に近い 10 カ月でしたが、無事日本に帰り就職活動に滑り込みました。

② 現在の仕事

大学を卒業し 1992 年春に三井物産株式会社に入社。それ以来約 20 年化学品部門で働いています。現在はジャカルタに駐在しており、主に合成樹脂、添加剤、肥料原料などの物流および投資の仕事に従事しています(写真㊧はアンモニアプラントで)。商社というと派手に聞こえるかもしれませんが、謙虚な前垂れ精神（買わせていただきます、売らせていただきますの精神）および近江商人の三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）をモットーに日々駆けずり回っています。

釈迦に説法ですが、今のインドネシアの概要を次にまとめてみました。GDP は USD3,500 を超えて、東南アジアでも最も中間消費者層（内需）が大きい国ということでにぎわっています。2012 年 7 月には IMF の局長が来られて、インドネシアが 10 億ドルですが IMF 債を購入しました（IMF に融資を行った)。1997 年のアジア通貨危機時に IMF 局長が腕組みしている真横でスハルト大統領が小さくなって署名している写真を思い起こすと隔世の感ありです。

インドネシア　ミニデータ

＊世界最大の島嶼国。東西 5,110㎞(北米より広い)、南北 1,800㎞ の域内に大小 13,000 の島。
＊面積は 186 万 ㎢(日本の約 5 倍)。島国のため、陸地で国境を接する国は 3 ヶ国(マレーシア、パプアニューギニア、東ティモール)と少ない
＊推計人口 23,756 万人。世界 4 位。
＊首都ジャカルタの人口は 950 万人。 近郊部を含む都市人口は約 2,600 万人で世界 2 位(1 位は東京/横浜)。AKB48 の姉妹グループとして JKT48 が 11 年 11 月にジャカルタでデビュー。
＊公用語はインドネシア語。ただ多民族を反映し地方言語は多く 250 以上。
＊イスラム教(88%)、キリスト教(9%)、ヒンズー教(2%)、仏教(1%)。人口面では世界最大のイスラム教徒国だが、イスラム教を国教とはしていない。
＊多民族国家で種族、言語、宗教は多様。スローガンは「多様性の中の統一」。
＊経済発展に向けては産業の整備がポイント。豊富な資源と資源高、安定した政権(ユドヨノ政権は 10 年)、堅調な内需に支えられ、当面は経済成長が継続見込み。
＊進出日系企業 1,005 社(2010 年)。8 割がジャワ島に。車のシェアの 95%は日系。
＊親日的マーケット、豊富な人口(内需)もあり、一般消費剤や飲食等サービス産業も進出。大塚化学ポカリスエットは市場に浸透しています。
＊ジャカルタの最低賃金は月額 180 万ルピア(約 200 ﾄﾞﾙ)。年々上昇しているが、中国や主要 ASEAN 地域に比べれば安い。
＊インフラ整備は遅れている。ジャカルタ市街地の慢性的な渋滞は深刻化しており、抜本策が急務(ジャカルタには地下鉄、モノレールのような都市型鉄道がない)。港湾での貨物の滞留も課題だ。

インドネシアはアジアで最も勢いのある国で、その人たちと具体的には以下の仕事を展開しています。

A.日系大手プリンターメーカー向けに高機能樹脂の JIT(Just In Time)在庫販売。簡単に言うと「必要な時に、必要なだけ、必要なところに」原料を納めることにより、最終のお客様であるプリンターメーカーが効率的に最終製品であるプリンターを組み立てることができます。

B.カリマンタンで天然ガスを活用してアンモニアを生産する工場を運営しています。アンモニアは主に肥料原料として世界中で消費されている大事な原料であり、世界の食文化に貢献しています。

C. 大きく成長している自動車産業向けに内装部品(軽くて丈夫な合成樹脂を使用）の原料を供給。需要予測を立て、タイとシンガポールから輸入して客先が効率的に生産できるように黒子的なお手伝いをしています。

プライベートではソフトボールが盛んで、我がチーム(写真)は今季ジャカルタ日本人会 3 部リーグで圧倒的な優勝を遂げ、2012 年 4 月からは 2 部で戦っています。

インドネシアは世界有数の火山国です。スマトラからジャワにかけて 2000～3000 ﾒｰﾄﾙの山々が連なっています。蒸気を利用した地熱エネルギーが期待されていますが、開発はなかなか進んでいないようです。こちらに来て始めた趣味の 1 つが山登りです。ジャカルタから車で 2 時間ほど南にいけばグデ山、パンランゴ山と 3000 ﾒｰﾄﾙ級の山があり、さらに西に足を延ばすとバンドンまで3つ4つ山がつながっています。

グデ山頂で。(下)は捕まえたコーカサスカブトムシ

観光資源として開発はほとんど進んでおらず、道順などを会う人にその都度確認する煩わしさもありますが、探検的な気分を味わうこともできます。

2012 年 3 月中旬にスラバヤ近郊のブロモ山、4 月の頭には西ジャワのハリムン山（ボゴール駅で知り合ったスマトラ出身の青年 2 人のキャンプに合流)、6 月にはジャカルタ歩こう会企画のグデ山、7 月は温泉が湧くパンチャール山と近場の山々を中心に楽しみました。

ハリムン山の麓に行く途中、チャーターしていた乗り合いタクシーのステアリングが全く効かなくなり大雨の山中で立ち往生しました。運転手さんがハンドルを解体、ステアリングを分解して油を抜き、破損部品を交換。暗闇での修理でした。マニュアル車だったので対応ができましたが、作業する姿は実に頼もしく見えたものです。

今後時間があればスマトラのクリンチ山、ジャワのメラピ山、バリのアグン山、ロンボックのリンジャニ山に挑戦したいと思います。そうです、私の尊敬するカリスマロック歌手 Iwan Fals の Yakiniku を歌いながら。

シンガポール発

日本文化の発信拠点で

堀川　晃一　('93 卒)

私がシンガポール駐在となったのは、2011 年 7 月の末日からでした。実は 2000 年から丸 4 年間、ジャカルタに駐在経験があります。当時は現在の独立行政法人国際交流基金ジャカルタ日本文化センターというところで、インドネシアと日本の友好親善に資する文化交流事業の企画・運営に携わっていました。

2004 年から 2011 年までは、日本国内で組織の予算関連業務と海外での日本語教育振興に関する業務を担当。ジャカルタの次はタイ・バンコクの駐在を密かに狙って、タイ語学校に通うなどして勝手に心積もりをしていました。が、その野望は 2011 年 7 月に在シンガポール日本国大使館への出向を命ぜられ、はかなく消え去ってしまいました。

大使館には文化担当部門として 2009 年に当時の鳩山首相とリー・シェンロン首相が出席の下オープンした「ジャパン・クリエイティブ・センター（Japan Creative Centre)」に出向ポストがあり、その 2 代目として赴任することになったのです。想定外でしたが、ジャカルタ駐在時代に頻繁にシンガポールに旅行に来ていたことがあり、家族一緒の駐在（妻、子二人）ということで、ほぼ即決でした。

JCC は 2007 年に日本政府が日本の魅力を広く海外に発信する「アジア・ゲートウェイ構想」に呼応、日本・シンガポール両政府が協力してつくった日本文化の発信拠点です。大使館から徒歩 5 分程の場所（Tanglin Road から Orchard Road にかわる辺り）にある建物を改修し、2011 年に大使館の一部として開設されました(㊤の写真は建物の前の筆者)。

また、民間とも積極的に連携し「革新と伝統」をテーマに、各種行事を展開。シンガポールだけでなく東南アジア諸国の相互理解と交流をさらに深化させるよう努めてきました。具体的には「日本のグッドデザイン展」を皮切りに、能、歌舞伎、三味線公演、茶道、華道のような伝統文化紹介を行う一方、現代日本文化紹介では、現代アーティストの作品展覧会、キャラクター

岩崎鬼剣舞メンバーと JCC のスタッフ

デザイナー、3DCG クリエーター、各種専門家などによる講演会や日本映画上映会も行っています。

JCC は前述の設立の経緯から、一方的に日本文化を紹介するのではなく、シンガポール側の意向も考慮して運営方針を考えています。

ただ、日本政府による文化芸術関連予算は諸外国に比べると少なく、緊縮財政の中では毎年逓減の傾向です。シンガポールでは人々が日本の情報に容易にアクセスでき、独自のルートで日本から公演団などを招へいするエスプラネードのような民間団体があったり、Anime Festival Asia のように日本のポップカルチャーを大々的に紹介するイベントが民間主導で毎年開催されています。だから、JCC としては各種フェスティバルなどに協力する形を取ったり、日本とシンガポールの若手の芸術家や専門家のネットワーク構築のきっかけとなるような事業に重点を注ぐようになりました。つまり、「一発花火」では終わらない、地元に根付く活動を心がけているのです。

最後に、シンガポールにおけるマレー語の位置づけについてひとこと。人口の約 8 割が中華系ですが、マレーシア連邦から独立した名残で、国歌「Majulah Singapura」も歌詞がマレー語です。また、地名や道路名にもマレー語由来のものが多く見られます（例：Pasir Panjang、Jalan Bukit Merah など)。

公用語は、行政用語の英語と、中国語、マレー語、タミール語の 4 つ。学校教育も英語で行われ、第 2 外国語で民族の母語を学習するようになっています。マレー系の人は約 14%。マレー語の話者の発音、特に母音の発音が全体的に不明瞭な気がします。基本的単語や語彙の使われ方がかなり違い、英語でしゃべった方が意思疎通をしやすい状況です。そんな中、街中で耳にするインドネシア語（中華系インドネシア人住民がとても多い！）が、心地よく感じる今日この頃です。

特別寄稿 *Apa & siapa*

縁と絆

ロウリ・エステル・パサリブ

(大学院　日本語・日本文化専攻博士後期課程)

夫、娘と三人の家族写真。(下)は両親と一緒に

はじめまして。Rouli Esther Pasaribu と申します。インドネシアから来て、大阪大学言語文化研究科で勉強しています。3 年前、桜が満開の 4 月に来日しました。しかし実は、初めての日本滞在ではありません。

30 年以上前、今私が経験していることと同じように、インドネシア人の父が日本で留学生活を送り、日本人とのハルフ女性と出会って結婚しました。私の母です。留学中に私が生まれて、父の留学期間が終わるまで、静岡県の清水に住んでいました。4 歳の時、初めて母国インドネシアに帰りましたが、祖父と祖母は日本に住んでいました。

インドネシアに帰国して半年後、祖父の訃報が届きました。しかし、当時は祖父が亡くなったという事実をよく理解できず、いつかまた起きてくれるぐらいの思いでした。今、この記事を読んでいる皆様の中には、祖父をご存知の方が多くおられるはずです。祖父は旧大阪外国大学（現大阪大学）のインドネシア語学科教員だったイスマイル・ナジールです(写真は 1982 年元旦。祖父母、両親、妹と。私は 3 歳半)。付け加えますと、祖父と祖母ファティマ・ナジール(旧名: 杉本文子)の二女が、母のファリダ・ナジールなのです。

私にとって、祖父はとても優しい人でした。公園で遊んだり、アイスクリームを買ってもらったり、神戸王子動物園へ連れてもらったり。楽しい思い出はまだ新鮮に心に残っています。祖父はどんな先生だったのか、皆様にぜひ教えてもらいたいですね。

人生には縁というか、どこかに不思議な繋がりがあって、謎がとても多いものです。日本で生まれ、30 年以上経って、また日本へ。母が生まれた町の大阪で暮らし、祖父が勤めていた旧大阪外大で勉強することになりました。日本語・日本文化を専攻した理由も、日本人である祖母ファティマ・ナジールのルーツを深く知りたかったからです。

現在は、学生であり、妻であり、5 歳の娘の母親です。家族 3 人暮らし。確かに、家族がいて、勉強に集中するのは大変ですが、自分としてももっと成長できるし、時間も大切に使うようになりました。とてもいい機会を与えてくれたと思います。また、夫と娘との絆がさらに強くなり、これもうれしいことです。

大学では、日本人学生のほかロシア、アメリカ、イタリアやブラジルなど、さまざまな国から来た学生たちと交流ができます。お互いの国や文化について話し合えます。文化によって違う点もたくさんあるけれど、人間だからこそ、共通している普遍的な点も多いと実感しました。

日本に来て、今専攻している日本の女性文学やジェンダー論についてたくさん学ぶ機会が与えられました。そのほかに、母国インドネシアのことについても、より深く理解しはじめました。母国を離れて、外側からインドネシアを見て、私はインドネシアの文化や自然の豊かさに気がつきました。西ジャワのボゴールでずっと住んでいた私は、日本に来て、初めて西ジャワの伝統的な楽器であるアンクルンを演奏しました。

「日本とインドネシア、どっちの方がいい」と聞かれたら、なかなか答えにくいですね。なぜならば、日本とインドネシアが両方ともなかったら、私は存在しないからです。両方とも、私の内面に内在化し、宝物になっています。

寄稿　Apa & siapa

勉強　再び

勝原 紀美代（'75 卒）

2008年の夏、日本とインドネシアの経済連携協定（ＥＰＡ）に基づき第１期介護福祉士候補者が来日しました。その中の１人、ジヤワ島出身のアナ・グストリアニ(Ana Gustriani)さんは、横浜で半年間研修を受け2009年１月、広島県山県郡北広島町壬生にある特別養護老人ホーム「正寿園」（水晴男施設長）に県内でただ１人着任しました。広島県北部に位置する北広島町には雪が少し積もっており、来日するまで雪を見たことがなかったアナさんにとって、ちょうど大寒の時期でもあり、さぞ寒かったことだろうと思います。

私は、近所に住んでいることもあって、アナさんの資格取得のため、勉強のお手伝いをすることになりました。大学を卒業して30年余りインドネシア語を使う機会がなかった私は、もう１度勉強しなおそうと思いました。学生当時使っていたテキストや辞書などは家に保管してありますが、今はスペリングも異なっており、新しく買うことにしました。書店で、大学時代に教えていただいた森村蕃先生の辞典を見たときは、とても懐かしくてすぐに買い求め、ページをめくりました。

また、広島インドネシア協会が広島市内で開催する 10 回の初級インドネシア語講座に2010年の８月から11月まで参加させていただきました。勉強しているときは、まるで学生時代に戻ったような気分でした。

アナさんは着任後、勤務しながら毎週火曜日の午前中の２時間は私と勉強し、火曜日と金曜日の午後２時間は施設の担当職員である唯保咲子(ただやす・さきこ)さんと、３年後の試験合格に向けて取り組むことになりました。

私との勉強についてですが、初めの１年間は市販の日本語のテキストを使いました。また、施設の就業規則などの書類を、辞書でチェックしながら私なりに簡単なインドネシア語に訳してアナさんに渡したのですが、私は正しい訳が知りたかったので、後になってアナさんに頼み、直してもらいました。

一緒に勉強したアナさんと。㊦は施設周辺と勉強風景

２年目からは、国際厚生事業団の支援プログラムに従って勉強をすることになり、事業団から提供されたテキストを順次一緒に読んでいきました。アナさんはまた、昼間勤務の後、毎週火曜日と木曜日の夜には自宅でｅ-ラーニングに取り組んでいました。土曜の夕方だけ勉強を休みにして、他の日は予習や自主勉強です。さらに受験前の１年間は週に１回、仕事が休みの日に唯保さんと一緒に集中的に模擬試験や過去問題をしました。日本語の勉強では、漢字の読み方がいろいろあるので苦労されたようです。

2012年３月、アナさんは介護福祉士の国家試験に見事合格し、多くの方から祝福され、私も本当にうれしく思います。そして、再びインドネシア語の勉強をする機会を与えていただいたことをありがたく思います。アナさんにはこれからも体に気をつけ、元気に過ごしてもらいたいと願わずにいられません。

再び「定員」問題について

宮崎　衛夫（'65 卒）=南十字星会会長

前号で、インドネシアの躍進ぶりと日本にとっての重要性に比し、インドネシア語専攻の定員が 25 言語中最下位であることについて問題提起をさせていただいた。その後、国際担当の理事や外国語学部長との面談で、インドネシア語の定員が過少であることは、大学側も認識されていることが確認できた。ただ「定員増」は簡単ではなさそうである。

大学側から今回明らかにされたことは、学部全体の定員 580 人の変更に関しては文科省の認可事項になっているが、25 言語の専攻各定員は外国語学部内で決められる。調整で、インドネシア語の定員を増やせば、どこかの専攻語を減らす必要があり、その抵抗は多かろうという。

一方、明るい情報としては、阪大との統合時には外国語学部所属の専任の日本人教員が 1 人になっていた。現在は 2 人(原、菅原各准教授)に増えており、定員増の環境は出来つつある、との説明を得ている。

このような状況のなか、同窓会組織としての南十字星会に出来ることは限られているが、機会あるごとに定員増強のお願いを根気よく続けていきたい。OB・OG 達による嘆願の署名活動なども拡げていきたいと考えているので、皆様のご理解・ご協力をお願いしたい。

消息　　ひとこと（敬称略）

東郷芳温（44 卒）=千代田区
今年米寿を迎える私たちの入学したスカルノ時代から思えば、インドネシアは随分躍進して、大国に成長しつつあるようですね。若い後輩の益々の活躍を!

原　勝利（50 卒）=千葉県
孫と孫娘が医者になる道。生きて晴れ姿を見たいと頑張っています。

山木迪男（50 卒）=小金井市
最近は格安航空 Air Asia で羽田-ジャカルタを往復しています。

河合由男（51 卒）=滋賀県
習ったおかげで、ブンガワンソロは歌えますが、プルチャカパン　バハサ　インドネシアはさっぱりです。お恥ずかしい話ですが!!

坂本重夫（52 卒）=埼玉県
昨年は、上海に遊びに行ったあとで「良性突発性頭部位めまい症」で椅子から転げ落ちるなど散々でした。

藪内　徹（53 卒）=横浜市
2012 年 1 月に第 12 胸椎を圧迫骨折し現在治療中です。

河上宗弘（58 卒）=茨木市
みなさまのご活躍を楽しく拝読しております。

山口　寛（58 卒）=枚方市
喜寿を迎えました。生きることは働くことだと、健康に留意しつつ、1 日でも長い現役生活を続けたいと思っています。

覚田　滋（59 卒）=埼玉県
インドネシア研修生を含めた在住外国人に対する日本語指導の手伝いをやっています。

西田達雄（60 卒）=調布市
インドネシア語の定員増に向け、具体的アクションを。

石川恵二（62 卒）=横浜市
前号で宮崎会長がインドネシア語専攻学生の定員増を訴えておられます。全く同感です。

小原一浩（63 卒）=大阪狭山市

6 月に大阪狭山維新政治塾を開きました。市議になって早いもので、既に 1 年が経過。拙著『「維新の力」で、まちを変えようや!』を 8 月に文芸社から出版しました。四六判 228 頁。定価 1365 円(税込み)。

島貫　全（63 卒）=神奈川県
最近はガーデニングに癒しと喜びを感じるようになりました。

堀田　実（63 卒）=千葉県
原発問題に端を発した放射能汚染のため、茨城県鹿島沖は全面的に釣りが出来ません。困ったものです。

扇谷竹美（66 卒）=千葉県
インドネシアでの生活 23 年。69 歳でピリオドを打つことにし、生活の場を日本に移しました。

大森靖彦（66 卒）=栃木県
前号で陸上部の石川恵二先輩の投稿、懐かしく読ませて頂きました。

朝倉俊雄（67 卒）=横浜市
2009 年から 3 年間のラオスでの JIKA 専門家活動を終え、3 月に帰国しました。ラオスではインドネシア輸出研修センターと連携、南南協力も実施しました。

佐伯　孝（72 卒）=栃木県
住友商事を退職して 4 年経過。栃木の山奥に引っ越し、家内と 2 人で“隠遁”に近い生活をしております。

道幸静児（81 卒）=泉南市
公認会計士業界も最近、急速にグローバル化が進んでいます。昨年にはインドネシア会計士とともに仕事をする機会もありました。

勝田英紀（82 卒）=大阪市
昨年の『格付けの研究』に続き『貿易実務のエッセンス』を出版。

高須加奈子（83 卒）=さいたま市
最近フェイスブックで懐かしい後輩たちとたくさん繋がることが出来ました。昔と変わらぬ(?!)お姿を写真で拝見したり、コメントを読ませていただくのを楽しみにしています。

土橋瑞江（96 卒）=川崎市
2011 年にインドネシア大学の BIPA で 2 カ月間のコースに通い、現地就職! 4 月からジャカルタの日系企業で働いています。

久保智美（12 卒）=大田区
東京八重洲で仕事をしております。勤務時間が昼から夜までで、帰りが遅かったりと大変なこともありますが、何とか頑張っています!!

野村知代（12 卒）=日野市
4 月から日野自動車(株)に勤務。海外工場を支援する部署で、晴れてインドネシア担当になりました。

◆おくやみ申し上げます◆

下記の方々の訃報が届きました

片岡正太郎(38 卒)=兵庫県 12 年 4 月
小藤　保(41 卒)=兵庫県 12 年 5 月
彦坂健一(45 卒)=神戸市 11 年 7 月
野坂嘉夫(51 卒)=島根県 09 年
平野福雄(57 卒)=神奈川県 12 年 1 月
松岡正勝(63 卒)=堺市 12 年 7 月